

おっぱいだより

39号

暑い夏がやってきました。熱中症になる方も増えています。こまめな水分補給を行っていきましょう。

さて、8月1日の新潟日報を読んだ方はいらっしゃいますでしょうか？

7月30日・31日と万代島にある朱鷺メッセで「第25回母乳育児シンポジウム」が開催されました。日本全国から母乳育児支援を行っている医師、助産師、看護師などが集まって、発表や討論を行ったことが記事になっていました。そのシンポジウムの様子を少しお伝えします。

「トキめき母乳育児」をメインテーマとし、母乳育児支援の基本となる「やさしさ」について考え、母乳育児が難しい状況にあっても、それぞれの状況に合わせて工夫、支援している実例が発表されました。また、母乳育児支援を社会に広げていくことの重要性がさまざまな立場から発表されました。

新潟からの発信では「新潟大学シッター制度」「妊カフェ、育カフェ」についての紹介、新潟県、新潟市の状況、取り組みの紹介がありました。

最後に「母乳育児新潟宣言」が宣言され、閉会となりました。来年は神戸で開催予定です。



小さな史乃のおっぱい物語～2.初めてのおっぱい～

志乃はNICUでしっかり管理されて元気になっているとパパが教えてくれた。

手術した当日、助産師さんたちがどうにかこうにか初乳を搾ってくれて、史乃に届けてくれた。この時のおっぱいは1日合わせて0.3ml。涙よりも少ないような、びっくりするくらいちょっぴりを、小さい注射器で吸い取っていく。「もったいない」と1滴もこぼさないように気をつけて搾ってくれた。

ママは酸素マスク、心電図、血圧の点滴などで管だらけ。志乃に会いにいくどころかトイレも行けずにベッドに寝たきり。

次の日も自分では搾ることができず、助産師さんたちが一生懸命搾って史乃に届けてくれた。

小さな史乃のおっぱい物語～3.搾乳って大変～

おっぱいの量は少しずつ増えていったけれど、ママの体調はなかなか回復しない。まだ管だらけで身動きが取れず、史乃の顔も生まれたその一瞬しか見ていない。パパの撮って来た写真をもてどのくらい大きくなったのかどうかはわかりにくいし、なんとなく実感も少ない。あれば夢だったのかしら？と思うくらい。そんな中、おっぱいだけは酸素が足りなくても、眠たい夜中でも搾らなくちゃいけないらしい。

しかも史乃は一日に飲めるおっぱいはほんのわずか。どう考えても搾っている量が多くて余る。そんなに毎回搾らなきゃダメ？ 楽することばかり頭をよぎる。それでも少しでも量が増えていくようにどんどん搾る必要があるそうだ。最初はおっぱいも痛くて大変だったし、夜中に起きるのが辛くて正直、おっくうだった。(搾ってもらっていて自分は寝ているだけなのにすみません)

先生の治療のおかげで体調は少しずつ良くなって自分でおっぱいを搾るようになった。そうになると、子どもの顔も見られない状態で夜中に起きて搾乳するのはかなり辛い。だって、とにかく眠い。目覚ましをかけても二度寝してしまう・・・なんて母親だろうと後悔しても眠気に勝てない。

助産師さんや看護師さんに叱咤激励されながらとにかく搾って史乃に届けた。そして生後4日目に車イスに乗って、酸素ボンベをつけてやっと面会にいけるようになった。

2回目に会った史乃はまだ小さくて、管がたくさんあったけれど、生まれたその日よりずっと頑張っていて大きくなっていた。

～つづく～



38号から引き続き、小さな赤ちゃんを産んで育てているお母さんのお話、その2、その3をお送りしました。(段落編集等を行っています但原文のままです。写真も掲載許可を頂いていません)。

最近ではBF (Baby Friendly) NICU というBFHをNICUにも拡大していこうという世界的な動きがあります。「赤ちゃんにやさしいNICU」という感じでしょうか。史乃ちゃんのような小さい子たちが、お母さんたちの所に帰るまで、あかちゃん、お母さん、家族にやさしい支援がどのNICUでもされるように期待しましょう。